佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園中学校・高等学校 校長　佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）・ワシントン補習授業校を経て、現職。

平和をつくる学力

啓明学園の学園歌に「平和をつくる若人の」という一節があります。「平和」が争いのないこと、特に国と国との間の戦争がないことを意味するとしたら、海外に住む経験のある子どもたちは、そうでない子どもたちよりもその大切さを痛切に感じるはずですから、帰国生のために創立された啓明学園の学園歌にこの言葉があるのは自然なことだと言えます。

平和の大切さに異を唱える人はあまりいませんが、皮肉なことに、多くの戦争が平和の名の下に始められます。平和を唱えるだけでは争いをなくすことができないことも私たちは知っています。平和の実現のためには、複雑な問題をしっかり分析し、理解して、適切な対応を考える知恵がなければなりません。それができる人はだれかということになると、外国に住み、いろいろな文化を体験し、国境を越えた友達を持つ子どもたちには、当然大きな期待がかかります。

◆オリンピックのときに

今年の夏は、オリンピックがありました。「平和の祭典」と言われるオリンピックが、国と国とのメダルをめぐる争いの様相を呈しているのは果たして本来のオリンピック精神にかなっているのかどうか、はなはだ疑問です。しかし、国同士のメダル争いがなければ、資金を集めることもできず、オリンピックそのものが成り立たなくなってしまうのも現実でしょう。どんなオリンピックが望ましいのか、どんなオリンピックができるのかなどを考えてみることも、世界を理解するためのよい学習課題になるでしょう。

勾玉作りの体験

海外に住んでいると、「国」という概念の不思議さ、不確かさを実感することがあります。オリンピックを見ながらいろいろなことを感じ、考えさせられた子も多いにちがいありません。

小さい子どもたちは、住んでいる国の友達と同じ気持ちでその国の選手を応援することが多いでしょう。少し大きい子どもたちは「自分の国」と今現に住んでいる国とが必ずしも一致しない場合があることに気づくでしょう。いつもは仲良しの友達の中で、思いがけず不愉快な思いをさせられることもあるかもしれません。すると、「自分の国」はどこなのか、そもそも「自分の国」というものが必要なのかというような、根本的な問題につきあたることになります。

法律上の国籍がある国、生まれた国、今住んでいる国、長く住んでいる国、友達が多い国、親が生まれた国、自分が属したいと思う国など、「自分の国」の要素はいろいろあります。国内で生まれ育った日本の子の多くは、これらの違いを意識する機会がなく、「国」について深く考えることもありません。

アメリカのような国では、一つの教室の中に、「自分の国」に関していろいろな思いをもつ生徒たちが混じっています。家族の中でさえ、子どもと親がちがう国を「自分の国」と感じている場合があります。不法滞在の状況にある同級生がいるかもしれないし、生まれ育った国を離れ、アメリカ国籍を得られる日を待ち望んでいる状況の人と接することもあります。